

(5) 腰椎過伸展(腰椎-体幹比)

臥位腰椎側面像で背部と腹壁にマーキングして計測

腰椎前彎の頂椎前縁から腹壁までの距離 (B) \_\_\_\_mm

同レベルでの背中から腹壁までの距離 (A) \_\_\_\_mm

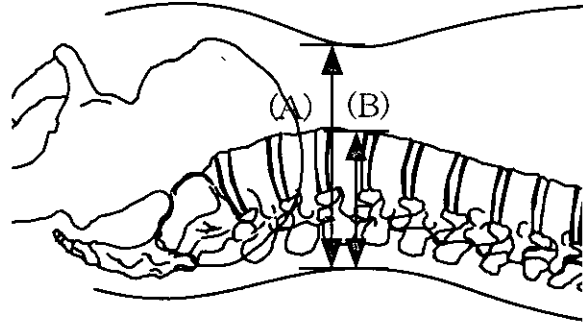
$B - A \times 100\%$  \_\_\_\_%

3 60%未満

2 60%以上～80%未満

1 80%以上

3・2・1



(6) 骨盤回旋

背中が床に着いた背臥位、下肢は自然位で計測

測定値 骨盤回旋\_\_\_\_度、方向 右・左

3 5度未満

2 5度以上～15度未満

1 15度以上

3・2・1

(7) 股関節脱臼

AHI (%) で判定

測定値 AHI\_\_\_\_%

4 60%以上

3 60～45%

2 45～33%

1 33%以下

右 4・3・2・1      左 4・3・2・1

(8) 股関節外旋制限

背臥位、股関節及び膝関節屈曲90度で、股関節の外旋を計測

測定値 右外旋\_\_\_\_度 左外旋\_\_\_\_度

4 両側とも外旋が45度以上

3 一侧の外旋が45度未満～30度以上

2 一侧の外旋が30度未満～0度以上、または外旋の左右差が50%以上

1 一侧の外旋が0度未満、または両側とも外旋が30度以下

4・3・2・1

(9) 膝窩角 Popliteal angle

背臥位、股関節屈曲90度で、垂線までの伸展制限を測定

測定値 右\_\_\_度 左\_\_\_度

3 15度未満

2 15度以上～45度未満

1 45度以上

右 3・2・1                      左 3・2・1

## 認知・コミュニケーション・社会性の評価について

分担研究者 岩崎光茂（日赤青森県支部受託青森県立はまなす学園）  
協力研究者 長 和彦（北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター）  
青山康二（北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター、臨床心理士）  
佐伯 満（北九州市立総合療育センター）

### 研究要旨

新しい時代にマッチした療育を目指す上から、認知・コミュニケーション・社会性の評価方法のあり方を検討した。カバーすべき領域の広さ、深さから二軸的評価を導入した。X軸的評価はスクリーニング的意味あいを持ち、Y軸的評価は発達の視点に立つものである。第一年度はその試作版の作成、第二年度はその試作版の信頼性、妥当性、有用性などを検討し、第三年度に完成版の作成を目指している。

### A) 研究目的

ノーマライゼーション思想の普及により、近年、障害を持った子ども達への療育のあり方が大きく変わってきた。それは、施設入所一辺倒であった、所謂、施設療育から、障害を持った子どもでも家族と一緒に地域で普通に生活するという在宅療育への変化であり、障害者年のスローガンにもなった「完全参加と平等」を目指すものでもある。そのような療育の変遷の中で、脳性麻痺児の療育も大きく変わってきた。

我々が求めている脳性麻痺児の療育の目標は、他の発達障害児のそれを同じように、子ども達一人ひとりが機能障害を持ちながらも、生き生きとした活動をし、制限のない参加を実現するように支援し続けることである。そのために、今ほど、認知・コミュニケーション・社会性に対する評価

が求められている時代もない。

そこで、新しい時代の療育にマッチした評価表の作成を試みた。

### B) 研究計画および方法

脳性麻痺児を中心とした発達障害児における認知・コミュニケーション・社会性の発達の評価法の作成を以下の計画にそって試みた。

#### 1. 第1年度

全国の肢体不自由児施設で、どのような評価方法が用いられているかを調査し、それらの結果を参考にしながら、認知・コミュニケーション・社会性の評価法の内容、あり方を検討し、試作版を作成する。

#### 2. 第2年度

全国の肢体不自由児施設の中から幾つかの施設を選び、そこで療育されている子ども

も達を対象に試作版による評価を行う。

試作版の信頼性、妥当性だけでなく、その有用性、使いやすさを含めて検討する。その上で、より完成度の高い完成版を作成する。

### 3 第3年度

完成版を全国の肢体不自由児施設ならびにこの研究に参加可能なあらゆる障害児施設の子も達に対して施行し、完成版の評価を行う。

## C) 研究結果 (試作版の作成)

### 1 X軸的評価表 (添付資料8)

X軸的評価は大きく、①見ること、聞くこと、認識すること、②学習、知識の応用、課題の遂行、③コミュニケーション活動、④対人行動、⑤特定な状況への対応の5つの大項目から成っている。それぞれの大項目には幾つかのサブ項目が設定されており、全体として57の評価すべき状態像(設問)が用意されている。

それぞれの設問に対する評価は、困難さの度合いと援助の度合いの両面からとした。困難さの度合いは、1 活動遂行不能、2 活動に困難あり、3 困難なし、の3段階評価とした。一方、援助の度合いは、1 人以外の援助で、2 人による援助で、3 両方の援助で、4 援助の使用なし、の4段階評価である。

また、今回用いた設問は全て、基本的には国際障害分類第2版に準拠している。それぞれの設問の最後の( )に国際障害分類コードを附記している。

### 2 Y軸的評価表 (添付資料9)

Y軸的評価により、認知・コミュニケーション・社会性の発達の側面の評価を試みた。その根幹をなす課題として、①自己の意図の伝達、②他者の意図の理解、③衝動・感情の自己統制、④自発性の4つの項目を選んだ。

発達の方向として、未分化から分化、単純から複雑、他者からの強制から自己統制、短時間から永続、個別から集団、欲望から道徳、受動的から能動的、さらに計画性などを基盤とした。その発達の方向性にそって、7つの発達段階を設定した。発達段階が1から7へ進むにつれて発達成長の跡が伺えるように工夫した。

### 3 X軸的評価マニュアル (添付資料10)

X軸的評価を行うに当たっての評価マニュアルを作成した。

評価に当たっての注意事項、評価方法の特徴などを示した。殊に、57の設問の意味や除外事項など、少しでも誤解のないように心掛けた。

## D) 考察

認知・コミュニケーション・社会性の評価は、そのカバーしなければならない領域の広さと深さを出来るだけ正確に捉えられる方法でなければならない。そのためには、量(広さ)と質(深さ)の問題を如何に整理するかが重要な課題であった。そこで、私どもは量と質を出来るだけ同時に評価する方法として、X軸ならびにY軸の二軸的評価方法を考えた。

X軸的評価は子ども達の状況をできるだけ広く捉えることに主眼を置いた量的な評価であり、言謂、スクリーニング的な意味あいを持たせている。

一方、Y軸的評価はX軸的評価の中から重要と思われる項目を選び、それらの項目について発達的に評価することに主眼を置いた。それにより質的評価が可能であると考えた。

X軸的評価の大項目として、①見ること、聞くこと、認識すること、②学習、知識の応用、課題の遂行、③コミュニケーション活動、④対人行動、⑤特定な状況への対応の5つを選んだ。しかし、これらの大項目の妥当性が検討されなければならないと思われた。特に、基本的ADL分野の評価表（高橋義仁、伊達伸也・添付資料6）との整合性のチェックが必要である。重複している項目の解消、見落としている項目の発見である。更に、Y軸的評価の項目との間の整理なども課題として残っている。

また、全体として57の評価すべき状態像（設問）を用意した。この設問の質と量に関する検討も重要な課題である。設問の数が多ければ、それだけ幅広い評価が可能になるが、時間がかかりすぎると利用されにくいと言う弊害も生む。一方、設問数が少なすぎれば、認知・コミュニケーション・社会性の評価として不適切となる。

私どものセンターでのプレリミナリーの検討からこの57の設問数であれば、30分から1時間弱で評価可能であった。以上より、設問数として60を超えないことが重

要と思われた。

さて、1997年にWHOから国際障害分類第2版が提案され、これが今後、全世界での共通の評価方法になる可能性が高いと考えられている。そこで、今回用いた設問は全て、基本的には国際障害分類第2版に準拠した。設問に用いたことばは出来るだけ中庸的なことばを選んだが、短い設問のため意味不明や誤解を招く表現がある。ことば自体の吟味が必要であると同時に、十分に活用できるマニュアルの整備が重要と思われた。

それぞれの設問に対する評価の基準は、設問に示された活動に制約があるかどうかである。また、その制約の度合いは日常生活の観察の中からの判断で行うべきものと思われる。

実際の活動はいろいろな困難を伴って遂行されるし、また、いろいろな補助手段や人的援助を借りて行われている。そこで、活動の評価に当たっては、その困難さの度合いと援助の度合いの二つの面から行うことが妥当と考えた。

困難さの度合いは、不明瞭は解答を極力少なくする意味から、1：活動遂行不能、2：活動に困難あり、3：困難なし、の3段階評価とした。一方、援助の度合いは、1：人以外の援助で、2：人による援助で、3：両方の援助で、4：援助の使用なし、との4段階評価とした。

また、このX軸的評価と国際障害分類による評価との移行をスムーズにする目的から、それぞれの設問の最後の（ ）に国際

障害分類コードを附記した。

Y軸的評価の根幹である発達の課題として、①自己の意図の伝達、②他者の意図の理解、③衝動・感情の自己統制、④自発性の4つが重要な項目と考えたが、それらの項目の妥当性の検討が必要であろう。項目数が多くなればより詳細になるが、煩雑が増してしまう結果となる。

自己の意図の伝達と言う課題は、形式を問わず、いかに自分の意志を有効に伝えるかに焦点を当てた。

他者への意図の理解は、(1)感情の理解、(2)ことばの理解の二つのサブ項目からなっている。感情の理解は、非言語性・言語性を問わず、相手の感情を理解しどの程度共感できるかという点に、ことばの理解は、表現されたことばや文章を理解する力、ことばの内容についての認知的側面に焦点を当てた。

衝動・感情の自己統制は、それぞれの個人のなかに発達してくる自己統制力とまわりからの力関係を視点に、(1)衝動や感情の自己統制力、(2)統制を生む力の二つから評価することとした。

自発性は、個人のなかに芽生えてくる(1)自発性の形態と(2)その内容の両面からの評価とした。

また、発達の方向性として、未分化から分化、単純から複雑、他者からの強制から自己統制、短時間から永続、個別から集団、欲望から道徳、受動的から能動的、さらに計画性などを考慮し、その方向性の中で7つの発達段階を設定した。発達段階が

1から7へと進むにつれて発達成長の跡が何えるように工夫した。

しかし、これらの7段階の妥当性が問題であった。それぞれが均等な発達段階を示しているとは言えない結果であった。

## E) 結論

以上、認知・コミュニケーション・社会性の評価のための試作版の作成に当たっての現状と問題点について報告した。

この試作版はまだ未完成の部分が多い。実際、第2年度、第3年度に行われる評価経験を通して、数多くの有意義な意見や感想が出されることが期待されている。そして、それらの篩いの中から、より完成度の高い評価法が生まれてくるものと思われる。

## 添付資料 8

### 認知・コミュニケーション・社会性の評価表 (X軸的評価)

氏名 (男、女) 生年月日 年 月 日 ( 歳) ID

診断病名

評価年月日 第1回 年 月 日、 第2回 年 月 日、 第3回 年 月 日、 第4回 年 月 日

	国際障害分類	困難度	援助度
<b>I 見ること、聞くこと、認識すること</b>			
1 感覚入力により認識すること			
1 何が見えたか理解できる	(a 00310 )	1 2 3	1 2 3 4
2 何が聞こえたか理解できる	(a 00320 )	1 2 3	1 2 3 4
3 何が触れたか理解できる	(a 00330 )	1 2 3	1 2 3 4
4 何の臭いか、何の味がわかる	(a 00340 )	1 2 3	1 2 3 4
2 空間と時間における関係を認識すること			
5 深さや高さがわかる	(a 00410 )	1 2 3	1 2 3 4
6 上下、左右、前後方など方向がわかる	(a 00430 )	1 2 3	1 2 3 4
7 異なる角度から見てもものが解る	(a 00460 )	1 2 3	1 2 3 4
8 前のことなのか、後のことなのか時間の関係がわかる	(a 00470 )	1 2 3	1 2 3 4
<b>II 学習、知識の応用、課題の遂行</b>			
1 記憶すること			
9 数日、数週間前の出来事の記憶を思い出すこと	(a 10110 )	1 2 3	1 2 3 4
10 数カ月、数年前の記憶を思い出すこと	(a 10120 )	1 2 3	1 2 3 4
2 課題の学習			
11 学習課題の性質を理解すること	(a 10410 )	1 2 3	1 2 3 4
12 学習活動を開始すること	(a 10420 )	1 2 3	1 2 3 4
13 学習課題の続けていくこと	(a 10430 )	1 2 3	1 2 3 4
14 学習課題を完了すること	(a 10440 )	1 2 3	1 2 3 4
3 異なる種類の課題を扱うこと			
15 込み入った複雑な課題を扱うこと	(a 10620 )	1 2 3	1 2 3 4
<b>III コミュニケーション活動</b>			
1 話し言葉によるメッセージを理解すること			
16 要請や指示を理解する	(a 20150 )	1 2 3	1 2 3 4
17 メッセージに含まれる感情を理解する	(a 20170 )	1 2 3	1 2 3 4
2 非言語的メッセージを理解する			
18 表情を理解する	(a 20220 )	1 2 3	1 2 3 4
19 指さしのような動作により伝達されるメッセージを理解する	(a 20230 )	1 2 3	1 2 3 4
20 描画や写真で示された表現を理解する	(a 20260 )	1 2 3	1 2 3 4
21 交通標識のようなサインやシンボルを理解する	(a 20270 )	1 2 3	1 2 3 4
3 書字を理解する			
22 書字を理解する	(a 20310 )	1 2 3	1 2 3 4
4 音声言語によるメッセージの生成			
23 会話を始めること	(a 20410 )	1 2 3	1 2 3 4
24 会話を維持すること	(a 20420 )	1 2 3	1 2 3 4
25 会話を中断したり、適切に促したりすること	(a 20430 )	1 2 3	1 2 3 4
26 会話を終了すること	(a 20450 )	1 2 3	1 2 3 4
5 メッセージのやり取りをすること			
27 質問すること	(a 20530 )	1 2 3	1 2 3 4
28 質問に答えること	(a 20540 )	1 2 3	1 2 3 4

	国際障害分類	困難度	援助度
6 非言語的なメッセージの生成			
29 身ぶりを使用すること	(a 20640 )	1 2 3	1 2 3 4
30 注意をひくために咳払いなどの非言語音を使う	(a 20650 )	1 2 3	1 2 3 4
7 書字を作成すること			
31 言葉や文字を手書きで作成し、メッセージを伝達すること	(a 20710 )	1 2 3	1 2 3 4
8 コミュニケーション補助具/技術を使用すること			
32 電話を使用すること	(a 20810 )	1 2 3	1 2 3 4
33 コミュニケーションエイドを使用すること	(a 20820 )	1 2 3	1 2 3 4
34 タイプライターやコンピュータを使用すること	(a 20830 )	1 2 3	1 2 3 4
<b>IV 対人行動</b>			
1 一般的な対人関係技能			
35 出会いや別れの時に、挨拶すること	(a 70170 )	1 2 3	1 2 3 4
36 エチケットのような社会的ルールに従うことや決まり事を守ること	(a 70230 )	1 2 3	1 2 3 4
2 個人的行動を管理すること			
37 自分の感情をコントロールすること	(a 70320 )	1 2 3	1 2 3 4
38 自分の衝動をコントロールすること	(a 70330 )	1 2 3	1 2 3 4
39 自傷行為を慎むこと	(a 70340 )	1 2 3	1 2 3 4
40 言語的攻撃性をコントロールすること	(a 70350 )	1 2 3	1 2 3 4
41 身体的他害行動をコントロールすること	(a 70360 )	1 2 3	1 2 3 4
3 親密な個人的関係を維持すること			
42 両親または両親と同等な人達と関係すること	(a 70410 )	1 2 3	1 2 3 4
43 兄弟姉妹と関係すること	(a 70440 )	1 2 3	1 2 3 4
4 友人との関係を維持すること			
44 新しい友達を作ること	(a 70510 )	1 2 3	1 2 3 4
45 友情を維持すること	(a 70520 )	1 2 3	1 2 3 4
5 公的場面において人と交流すること			
46 先生や訓練士と交流すること	(a 70610 )	1 2 3	1 2 3 4
47 子ども同士相互交流すること	(a 70620 )	1 2 3	1 2 3 4
6 他の環境にいる人々と交流すること			
48 未知の人と交流すること	(a 70730 )	1 2 3	1 2 3 4
<b>V 特定の状況への対応</b>			
1 危険な環境に対処すること			
49 脅威を与える人や危険な人がいる環境に対処すること (対人的危険)	(a 80330 )	1 2 3	1 2 3 4
50 交通の脅威などに対処すること (物理的危険)	(a 80380 )	1 2 3	1 2 3 4
2 幼稚園や学校などに関係する行動			
51 集団行動が取れる	(a 80440 )	1 2 3	1 2 3 4
52 定期的に時間通りに参加できる	(a 80450 )	1 2 3	1 2 3 4
3 個人的社会活動			
53 遊ぶこと (屋内、屋外のゲームに参加して遊ぶこと)	(a 80610 )	1 2 3	1 2 3 4
54 家に訪問者を迎え入れること	(a 80620 )	1 2 3	1 2 3 4
55 絵画や楽器演奏など芸術的 pursuit に従うこと	(a 80650 )	1 2 3	1 2 3 4
4 経済的スキル			
56 お金とは何か、値打ちとは何か、どのように使うかを理解すること	(a 80710 )	1 2 3	1 2 3 4
57 予算を立てたり、出費の計画を立てること	(a 80720 )	1 2 3	1 2 3 4



## 添付資料 9

### 認知・コミュニケーション・社会性の評価表 (Y軸的評価)

	評価
I 自己の意図の伝達	
(1) 手段	I - (1) -
1 泣く、叫ぶ、微笑む	
2 視線で対象を指し示す	
3 指さし、手さしなどで具体的に対象を指し示す	
4 一方的だが、言葉、明確なジェスチャーを使うことができる	
5 言葉、ジェスチャーなどでのやりとりができる	
6 理解されないとき、繰り返し伝えようとする	
7 表情、まなざし、イントネーションなどを交えて意図を伝える	
(2) 内容	I - (2) -
1 苦痛や快などの生理的欲求や感情を伝える	
2 自分の興味対象への養育者の注意の促し	
3 欲求・要求の対象を明確に指し示す	
4 日常的な欲求・要求を伝える	
5 家庭内などの日常的な話題	
6 家庭以外の日常的な話題	
7 抽象的内容	
(3) 対象	I - (3) -
1 おもに両親など養育者	
2 兄弟、姉妹など身近な子ども	
3 養育者以外の親しい大人に対しても可能	
4 兄弟、姉妹以外の子ども同士でも可能	
5 見知らぬ人にでも可能	
6 小集団のなかでも主張できる	
7 大集団のなかでも主張できる	
II 他者の意図の理解	
(1) 感情の理解	II - (1) -
1 全く他者に無関心	
2 養育者の感情に左右される	
3 養育者の表情を理解し、行動を変化させる	
4 他者の感情を理解し、心配したり、慰めたりする	
5 絵本や物語の登場人物の気持ちを表現できる	
6 物語を構成できる	
7 自分の気持ちを客観的に表現できる	
(2) ことばの理解	II - (2) -
1 ことばの理解なし	
2 最も基本的な語彙は理解できる	
3 簡単な指示に従える	
4 簡単な抽象的な語彙を理解できる	
5 家庭内での日常生活上の話題は理解できる	
6 家庭以外に関する話題も理解できる	
7 複雑な、または抽象的な会話も理解できる	

### Ⅲ 衝動、感情の自己統制

#### (1) 衝動や感情の自己統制力

Ⅲ- (1) -

- 1 自己の感情をコントロールする術を持たない
- 2 あやしなと大人の対応で落ち着くことができる
- 3 禁止や指示を理解し、従うことができる
- 4 承認を求め、叱責を避けようとする
- 5 大人がいなくても、その期待に添った行動がとれることがある
- 6 集団のなかで、ルールに従った行動がおおむねとれる
- 7 自分が正しいと思う行動をとることができる

#### (2) 統制を生む力

Ⅲ- (2) -

- 1 養育者の叱責
- 2 養育者のことばや態度で
- 3 自己の意思で、養育者の意図を先取りして
- 4 一対一の場で指導的成人からの注意や監視で
- 5 一対集団のなかで指導的成人からの注意や監視で
- 6 大人がいなくても子ども同士のなかで自発的に
- 7 自分の考えで

### Ⅳ 自発性

#### (1) 形態

Ⅳ- (1) -

- 1 全く受け身
- 2 大人の導入や指導で遊びを始め、続けようとする
- 3 自ら遊びを始め、続ける
- 4 大人や友だちをリードして遊びを始め、続けようとする
- 5 競い合いながら遊べる
- 6 楽しいことがあれば、計画を立てて行動する
- 7 自ら計画を立て、それに添って行動する

#### (2) 内容

Ⅳ- (2) -

- 1 一人遊びを楽しむ(感覚運動遊びのレベル)
- 2 一人遊びを楽しむ(手段、目的、関係のある遊び)
- 3 大人とのやりとりのある遊びを楽しむ
- 4 同じ場所で、一緒に道具を使って子ども同士で遊びを楽しむ
- 5 ままごとなどテーマや役割がある遊びを子ども同士で楽しむ
- 6 仲間と一緒にいろいろな行動を楽しむ
- 7 自分の将来の目標にむけて行動ができる

## 添付資料 10

### 認知・コミュニケーション・社会性（X軸的評価）の評価マニュアル

#### <評価に当たって>

1. このX軸的評価は評価の幅を出来るだけ広げたため、スクリーニング的意味合いが強い。Y軸的評価と組み合わせることによって、深みのある評価が可能である。
2. それぞれの設問に示された活動に制約があるかどうかの評価の基準である。評価の標準はあくまでも障害を持たない子ども達である。
3. 活動の制約は、それぞれの個人に焦点が当てられた活動の制限に関係しており、個人が一連の活動を遂行するのが困難であったり、出来ないことを指す。
4. 実際、活動はいろいろな困難を伴って遂行されるし、またいろいろな補助手段や他人の助けを借りて行われたりする。そこで、活動に対する困難度、援助度の両面から評価する。
5. 困難度の評価は、1：活動遂行不能、2：遂行に困難がある、3：困難なし、の3段階であり、援助度の評価は、1：人以外の援助で、2：人の援助で、3：両方の援助で、4：援助の使用なし、の4段階である。
6. 評価の回答は、日常生活での観察の積み重ねのなかで判断する。個人の活動の質はそれぞれの疾病の種類、知的能力や認知能力のレベルによって異なる。
7. 設問の項目は、基本的に国際障害分類第2版（1997年）に準拠している。（ ）の中に、国際障害分類コードを示した。
8. 国際障害分類第2版への移行の仕方は参考項目を参照。

#### I. 見ること、聞くこと、認識すること

この章は、視覚、聴覚、そして感覚の機能障害の結果を反映している。原因は何であれ、活動そのものを記録する。あくまでも、それぞれの日常生活の場面での出来事であり、全く架空の状況は想定しない。

I-1は感覚入力を理解し、それを経験と関連づける活動である。

設問1は視覚刺激を認め、そして何が見えたかを理解することであり、単に見ることは除外する。

設問2は、聴覚刺激を認識し、何を聞いたかを理解すること。声と音を認識することが含まれる。しかし、単

に聞くことは除外する。

設問3は、触覚刺激を認識し、何が感じられているかを知る。形、材質、温かさ、硬さを認識する。

設問4は、臭覚と味覚刺激を認識し、何の臭いか、何の味かが解ること。臭い、香り、食物、飲物、そして煙やガスのような危険な物質も認識すること。

設問5は、深さ高さとして測定することを可能にする感覚情報を解釈すること。

設問6は、上下、左右、前後など方向を認識することを可能にする感覚情報を解釈すること。

設問7は、形態の不変性を認識することで、角度を変え

て見ても対象を認識できる。

設問8は、時間の関係、時間の配列を認識すること。

## II 学習、知識の応用、課題の遂行

ここは、認知や知能の機能障害の実際上の表れに関連する章である。

II-1は、情報やイメージを思い出すことであり、記憶の困難さは物忘れを指す。物忘れは、特定の記憶の障害の影響だけでなく、注意や集中力に問題があることもある。

設問9は、最近獲得した情報や出来事を記憶すること。課題や予約を記憶することも含む。

設問10は、過去の出来事や過去に獲得した情報を記憶することであり、自分の過去の歴史について詳細に記憶することも含む。

II-2は、学習上の課題を理解したり、学習課題を開始し完遂することを意味している。学習の課題に関する準備、手順、学ぶべきこと、全てを含んだ活動を意味している。

設問11は、学習すべき課題の意味や内容を理解することである。

設問12は、学習活動をスタートするに当たって、適切な準備や方法で課題を始めること。設問13は、学習課題の取り組みを続けること。設問14は、学習課題を終了したり止めたりすることである。

II-3（設問15）は、込み入った複雑な課題を扱うことであり、注意力や集中力などにも影響を受ける。

順序が決まっている行動を順序通りに出来るかとか、一つの指示の中に、二つ以上の内容が含まれているのを同時にできるかを問うている。

## III. コミュニケーション活動

コミュニケーション活動には、メッセージを送信し、

受診し合う最低2人の関係が成り立っていないなければならない。この活動にはメッセージの形成能力や受診したメッセージを解釈し、理解する能力が含まれる。また、表情や身ぶりのような非言語的コミュニケーション方法も含まれる。

設問16は、構文の違いにより、特殊なメッセージを理解すること。要請と必要性、口頭指示と報告の区別を理解することを含む。

設問17は、メッセージに含まれる感情を状況に応じて理解すること。ユーモアの理解を含む。

設問18は、眉をひそめる、歯ざしりする、微笑むと言った顔の運動と表現により示される悲しみや驚きなどのメッセージを理解すること。

設問19は、身振りを理解すること。

設問20は、描画や写真で表現されたものをりかいすることで、一般的なサインやシンボルは除外する。

設問21は、便所を表現するための男と女、方向を示す矢印、侵入禁止の標示、警告標識、交通標識のようなサインやシンボルの理解。

III-3（設問22）は、書かれたものにより伝達された意味を理解することであり、読書に関する専門的技術は含まれない。

III-4は、音声言語によるメッセージの生成である。

設問23は、言葉の交換を導く適切な会話を開始することを意味している。

設問24は、適切な応答、反応、そして話し手の適切な交代により、会話を維持すること。

設問26は、会話を終了するために適切な言葉を使うことを意味している。

III-5は、メッセージのやり取りに関する相互作用と関連する技能を指している。

設問27の質問することは、情報を求めてことばを述べることである。

設問28は、質問に答えて情報を提供することを意味している。

Ⅲ-6は、メッセージを伝達するために、身ぶり、表情、非言語を使うこと。

設問29は、同じ言語を話さない人とコミュニケーションを取る時のように、メッセージを伝える唯一の方法として指さしや物まねのように身振りを表現的動作として用いること。

設問30は、注意を引くために、それぞれの文化圏でふさわしい音を用いること。

Ⅲ-7（設問31）は、書字を作成し、メッセージを伝達すること。

Ⅲ-8は、コミュニケーションの目的のために中間装置を使用することであり、設問32は、コミュニケーションの方法として電話を用いることである。

#### IV. 対人行動

この章は、社会的な状況において人間関係を築くための行動である。このような状況は相手が知人の場合か未知の人の場合か、少数か大勢か、予測可能か可能でないかなどを含んでいる。

IV-1は、一般的な対人関係を始め、維持し、別れる時の技能である。

IV-2は、個人の一般的な感情、衝動の加減に関係することである。詳細はY軸的評価にて行う。

IV-3は、家族など親密な個人的関係を築き、維持すること。設問42は、両親またはそれと同等の人達を指す。設問43は、兄弟姉妹を指す。

IV-4は、社会的立場や年齢が同等の友人や知人と社会的接触を維持すること。

設問44は、交友関係に発展する新しい社会関係を始めることであり、新しい人々を知り、興味を分かち合うことである。設問45は、友人との接触を維持すること。

IV-5は、学校や職場のような公式の規則に基づく社会環境の中で、人々と社会的交流を計ることを意味している。

設問46は、先生や訓練士など目上の人との交流についてであり、設問47は、社会的に同等な立場の人との交流についてである。設問47は、全く未知の人との交流することを意味している。

#### V. 特定の状況への対応

V-1は、非常に危険、あるいは生命を脅かすような状況に対処すること。設問54は、对人的危険に対して、設問55は、物理的危険に対しての対処の仕方を指している。

V-2は、幼稚園や学校などでの学習行動に課題と関連している。教室や自己学習で見られる行動がチェックの対象になる。

V-3は、個人的な社会活動のチェックであり、遊ぶことから芸術的活動まで含まれる。

V-4は、経済的スキルであり、貨幣の価値を理解し、郵便局や銀行などを理解し、扱うことも含む。

(参考項目・国際障害分類第2版への移行の仕方)

- ①国際障害分類コードの小数点第1位に困難度を、第2位に援助度を記載する。
- ②困難度は、困難なし(3) 0、小さな困難:1、中くらいの困難・2、大きな困難・3、活動遂行困難(1)・4、困難度不明・9とする。
- ③援助度は、援助の使用なし(4)・0、人以外の援助(1)・1、人の援助(2) 2、両方の援助(3) 3、援助不明・9とする。

厚生科学研究費補助金  
障害保健福祉総合研究事業

脳性麻痺など脳性運動障害児・者に対する治療および  
リハビリテーションの治療的効果とその評価に関する総合的研究  
～障害児 者等の機能改善へ向けて臨床医療的な視点から～

平成11年度 研究報告書

平成12年3月31日発行

発行責任者 東京都板橋区小茂根1-1-10  
心身障害児総合医療療育センター  
坂口 亮

印刷所 東京都板橋区清水町88-6  
有限会社 丸産印刷